

ベストピアは 小原靖夫の 個人誌です

2012年12月第310号



突然の別れ、溢れる涙

親しい人との別れは夫々に特別な意味を持ちますが、喪失感からくる哀しみ 寂しさは寒空にひとしお堪えます。ましてや、自分より若い方の場合は気の毒 さと言いますか、憐れと言いますか、その方の挫折感への同情のような感じが あります。

(1)大祖父との別れ

息子家族が養子縁組しました貴子の祖父が 90 歳を前に急逝したのが今年の 10 月 15 日でした。三日前の地区の 100 年記念祭のお祭りに元気な姿で出席し笑顔一杯の写真が残っています。宝塚の里山で戦後間もなく医院を開設し長い間、地域医療に貢献して、地域の多くの方の尊敬を集めていましたので、引退していましたが大勢の方が葬儀に参列してくださいました。喪主は息子の譲治が立派に務め 49 日が 12 月 2 日でした。今にも雪が舞そうな寒空の中で納骨を終り夜遅くホテルに戻りました。

(2)友の急逝

翌日8時に携帯電話が鳴りますがモタモタして取れません。誰からかは分り折り返しの電話をするも話中が続きます。暫くして「主人が亡くなりました」とのメールがはいります。 11月は28-29日を含め三度お会いしており、次の約束をして別れたばかりです。元気でこれから、新しい道を歩き始めたばかりでした。私から観れば立派な会社を遺され、良い奥様と子供たちに恵まれ、精一杯生きてこられた方でしたので、いい人生だったと弔辞には書きましたが、ご本人からすると少し悔いが残ったかも知れません。

宝塚から自宅に戻らず現地に飛び、数時間後に遺体の前で慟哭した自分に驚いています。 遺体の前にいくまでと遺体に直面した時の自分の感情が全く異なっているのです。どちら かと言うと冷たい人間だと自分では思っていますが、自分の意思で制御できない感性の自 分のいることに気づかされた時と場でした。

(3)5 度目の弔辞

翌日夜がお通夜、翌々日が本葬と決まり、弔辞を読むことになりました。

段取りは良い方だと自負しているものの、まさか弔辞の段取りはありません。集中して過去を短時間の内に遡り思い出さねばなりません。5 人目の弔辞でしたので形式は記憶に残っていましたが、いざ原稿を書き始めても纏まらないのです。落ち着け落ち着けと自分に言いきかせながら、記憶と文章の結合に悩んでいる内に時間が駆け足のように経っていきます。偶然か必然かわかりませんが大祖父と同じ宗派でしたので貴子にお経の一説をファックスしてもらい、それを縦糸にして、家族、会社、経営理念、友人、取引先と横の関係を思い浮かべ第 1 版の原稿を仮作成、気分転換に外出して、筆と巻紙を求めてデパートにいきますと、便利になってワープロでも作成できるように印刷可能な式辞用紙があるので、それを求めようと安易な誘惑に襲われましたが、負けずに折りたたみ和紙を求めました。

慣れない筆をとり原稿を纏めながら涙が溢れるままに和紙に向い出来上がったのが夜半を 過ぎていました。翌日見直すと欠点ばかりが見えてきて、納得出来ずやり直しの必要があ ると促され、ノートに再考再整理、もう一度デパートに行き和紙と筆を買う。お通夜に行 く前には完成させたかったので懸命に頑張る、まだ集中力があることに驚きながら理屈抜 きで頑張る。お通夜から戻りホテルの部屋で読みの練習、時間の計測、納得して眠りまし た。

(4)納得のいくまで

朝4時半に目が覚め、もう一度やり直しと感性が命令するのを感じ、5時間あるから大丈夫と思い書き始めて、暫く進んだところで用紙の残量が不足することに気づき、この時間帯では入手困難、焦る、焦る、考える、そうだ文字を小さくすればよいと気づく。何とまどろこしい事と読者は思われるでしょう。格闘してほぼ納得、第1版から相当のレベルアップを実感、読みの練習、時間のスピード調整、幸いに弔辞は一人と分かっていましたので18分を申告、いざ本番で読みますと、自分の書いたものかどうか分からなくなって数カ所詰まってしまいました。涙が溢れる声が震えるのをこらえようもなく後ろにおられる多くの参列者をすっかり忘れ故人と対面してしまいました。

親しい人は自分の存在の一部になっているようで、喪失感が否めません。

まだ存在しているかのようで、会えない現実に 戸惑います。家族の方は、哀しみと寂しさが増 し加わる中で日常の社会生活に戻らなければな りません。

別れはどんな信仰をもっていても悲しいものです。学ぶべきは「明日はわからぬわが身かな」 一層の整理整頓を痛感しているところです。そ して弔辞はこれが最後と宣言。



「師走風、第九の響き胸にあり」

(1)地方に眠る逸材ここにあり

この表題の句は明石市の藤井義正氏の創作で、ベートーヴェン好きには、グーときます。 私は 11 月から明石市垂水区の文化活動を支えておられる藤井義正氏の「心の詩」講座に 県外から参加させていただいています。学研的な真摯な方であり、かつ温和で親しみ深く、 熱い情熱で第九を研究されています。博学さには驚きの連続です。今月は特別講座「心に 第九を抱け、そして第九に抱かれて生きよ」の今までの体験を遙かに超える素晴らしい内 容でした。幅広く深さの見えない知識とレベルと品格の高さがこれほど調和しておられる 方は多くはいません。10種類の配布された資料の前で「ううううっっっーーー」と前 のめりになりました。

私もいつの頃からか第九の合唱の日本語訳がおかしいと思って時間を見ては調べていたのですが、専門家に出会い教えを請っております。

(2)第九の合唱を全訳

藤井義正氏の日本語訳を頭にいれて第九を聴きますとベートーヴェンの「苦悩を突き抜け 歓喜にいたる」魂が、今ここの自分の事として迫ってきます。特に歓喜の深い意味が万人 にわかる素晴らしい訳です。合唱全てを楽譜から訳されています資料をベストピアホーム ページに添付しましたのでご覧ください。丁寧に、学研的に、真実を追求されて、感動的 です。

(3)藤井義正氏のメッセージ

「第九」を愛する皆さまへ

ベートーヴェンの「第九」は、本当に素晴らしい音楽です。歌っても、聴いても、深い感動で心が満たされます。人々の幸せを祈りながら懸命に生きる者にとっても心強いエネルギーを与えてくれます。

私はあるきっかけで、「第九」に使われているシラーの詩「歓喜に寄す」の全編を、一語一語丁寧に味読する機会を得ました。一人の人間として心の底から納得できるように味わってみました。するとそこに、これまで思ってもいなかったような、素晴らしく壮大な世界が広がっていることを知りました。「第九」が、私たち人間にとっての根源的な喜びを謳った音楽だということをしりました。

その「喜び」とは、

大いなるいのちに抱かれてある喜び

「大いなるいのち」とは、

星を運行させ、花を咲かせ、私たち人間を生かしているいのち

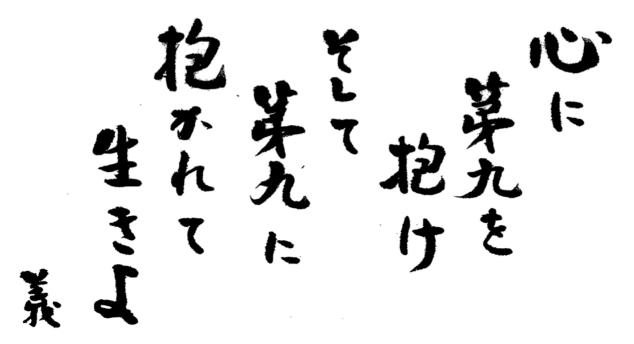
のことです。

世界中のすべての宗教の底を流れている宇宙的生命観です。

シラーを丁寧に研究され、作詞の動機のみならず、シラーの生い立ちからくる世界観、ベートーヴェンがこの詩を引用した動機、引用の仕方、引用の強弱、省略等細かな研究の成果が著作「私の〈第九〉」です。

ご希望の方は直接お申し込みください。素晴らしいサインも頂けます。

674-0053 明石市大久保町松陰 227-3 藤井義正氏 1000 円(送料込み)



藤井義正氏2012年12月「心の詩」講座資料より